高エネルギー宇宙物理学 のための ROOT 入門

- 第 4 回 -

奥村 曉

名古屋大学 宇宙地球環境研究所

2019年5月16日

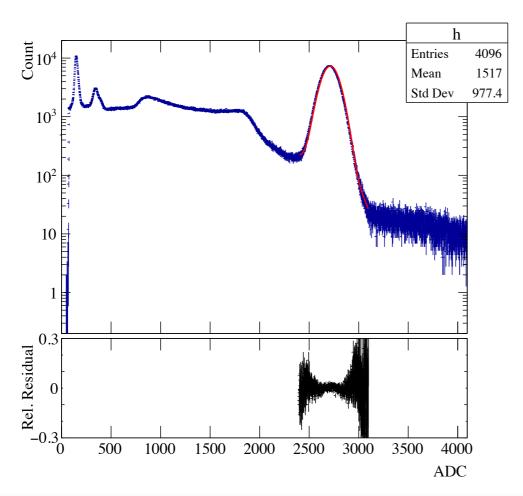


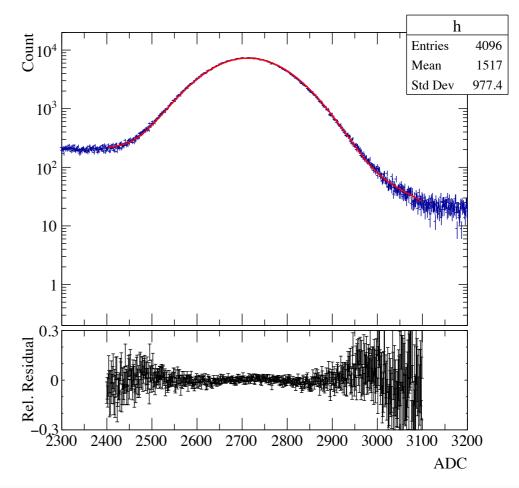


更新してください



1次関数と Gaussian でのフィット

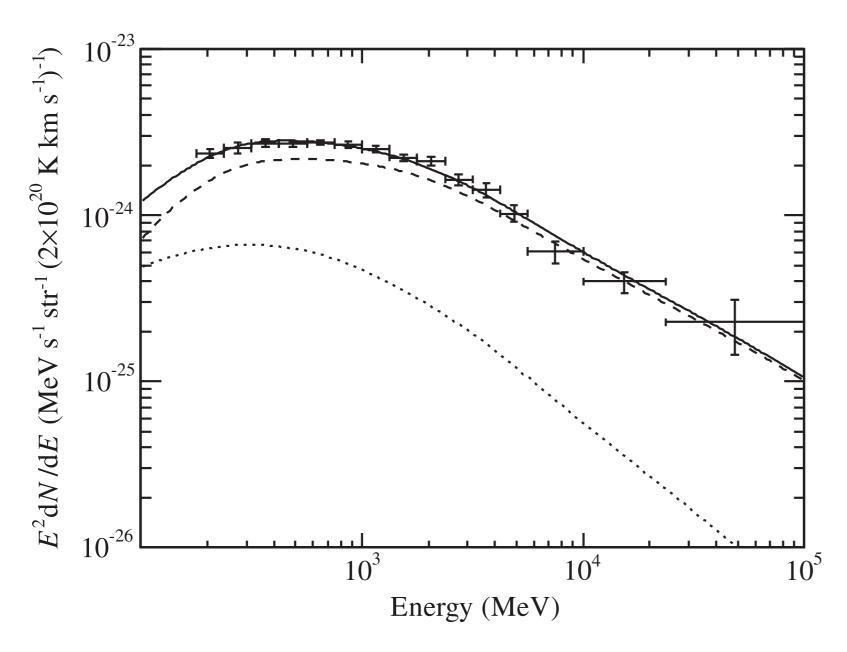




```
000
$ cd RHEA/src
 ipython
  [0]: import Cs137
In [1]: Cs137.Cs137(2400, 3100)
                              誤差の推定が
                              正しいか怪しい
                              7.34998e+00
                 7.15872e+03
                                         -3.43986e-02 2.28192e-05
     p2
     р3
                             7.64383e-02
                 2.71332e+03
                                          -1.37583e-04 -2.26760e-03
                 8.62900e+01
                              6.83971e-02
                                          5.42307e-04
                                                      -4.07220e-04
                  非常に小さい確率となってしまう
Prob. = 9.793e-07
```

グラフ

グラフ (graph) とは何か?



Ackermann et al. (2012)

- 得られたデータの変数を図表化したもの
- ** 狭義には2つ以上の 変数の関係を示すた めに軸とともにデー 夕点を表示したもの
- 実験での使用例
 - 光検出器の印加電圧と 利得の関係
 - エネルギースペクト ル (energy spectrum)

大事なこと

- ** (2次元の場合) 独立変数 x と従属変数 y の違いを意識 する
 - 例えば光検出器の利得(従属変数)は、印加電圧(独立変数) を変化させることで変化する
 - ▶ 滅多に見かけないが、これらを入れ替えて作図しない
 - 散布図の場合、どちらの変数が従属かは分からないので注意
- 無闇にデータ点を線で結ばない
 - 測定値には誤差がつきものなので、折れ線グラフはデータ解 釈に先入観を持たせる
- 誤差棒の付け方 (第 2 回資料参照)
- エネルギースペクトルの横軸誤差棒はビン幅の場合あり

ROOT のクラス

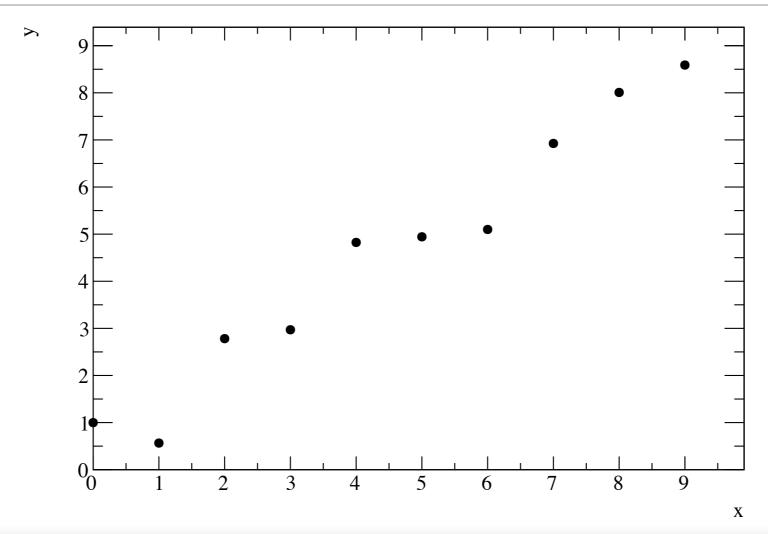
TGraph

- ▶ 2次元のグラフ(独立変数1つと従属変数1つ)
- 誤差棒無し
- TGraphErrors
 - ▶ 誤差棒あり
- TGraph2D と TGaph2DErrors
 - ▶ それぞれ 3 次元版(独立変数 2 つと従属変数 1 つ)
 - ▶ 名前が紛らわしいが、x/y/z の 3 つの値を持つ

1次元グラフ

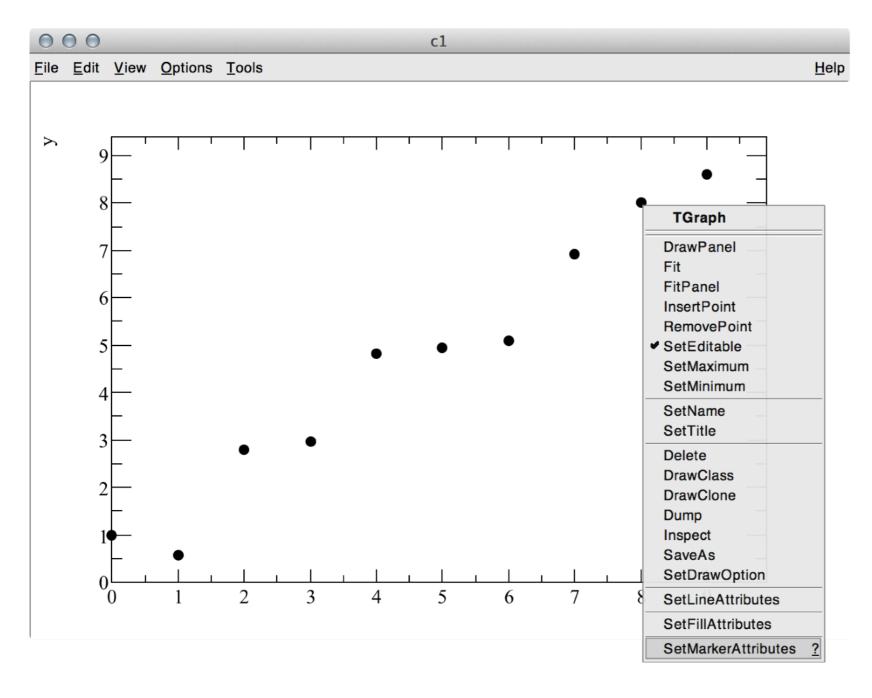
変数 x に対して従属変数 y(x) が決まるもの

単純な例



```
000
$ root
root [0] TGraph* graph = new TGraph;
root [1] for (int i = 0; i < 10; ++i) {
root (cont'ed, cancel with .@) [2] double x = i;
root (cont'ed, cancel with .@) [3] double y = i + gRandom->Gaus();
                                                                   ● 適当に値を作り
root (cont'ed, cancel with .@) [4] graph->SetPoint(i, x, y);
                                                                   2 点を追加する
root (cont'ed, cancel with .0) [5]}
root [6] graph->SetTitle(";x;y;")
                                                      ③ タイトルはコンストラクタ外で
root [7] graph->SetMarkerStyle(20)
                                                      4 初期値はドットなので変更する
root [8] graph->Draw("ap")
                                                      ⑤ axis と point を描く
```

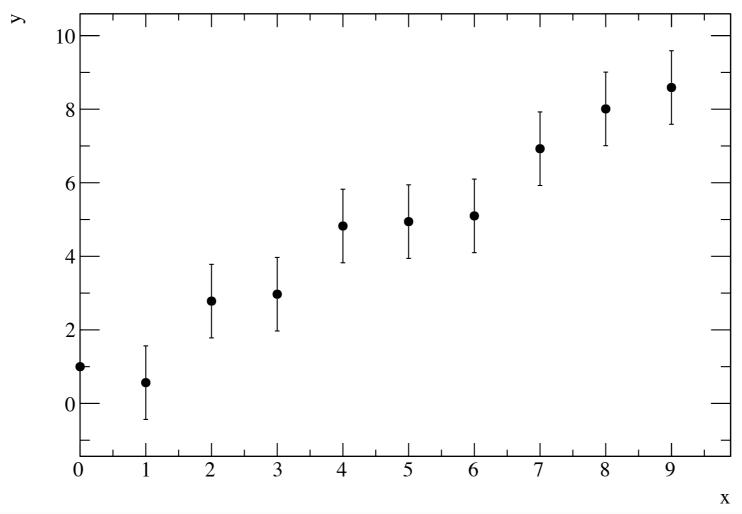
マーカーの変更をする

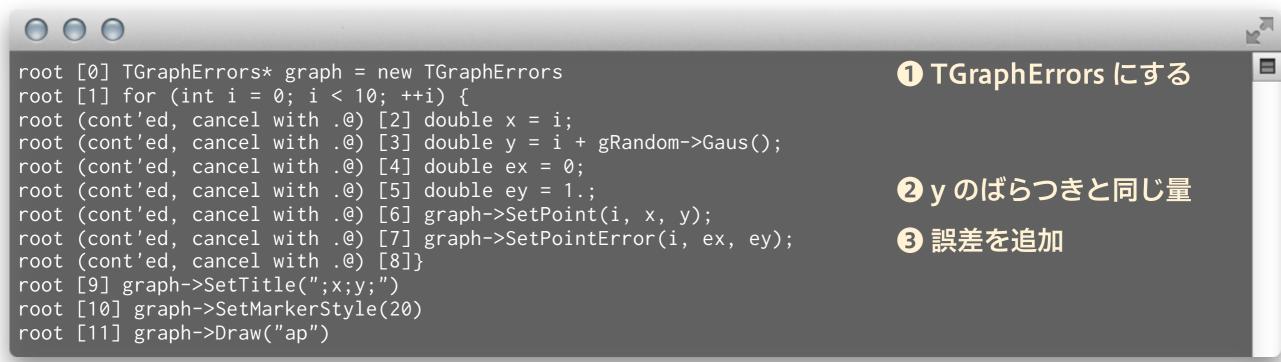


○ ○ ○ c1_Editor Style Name ::TGraph Line Opacity 1 Fill Opacity Title ;x;y Shape No Line Smooth Line Simple Line Bar Chart Fill area Show Marker **Exclusion Zone** ☐ +- None Marker 1 **⊕** ¥ □

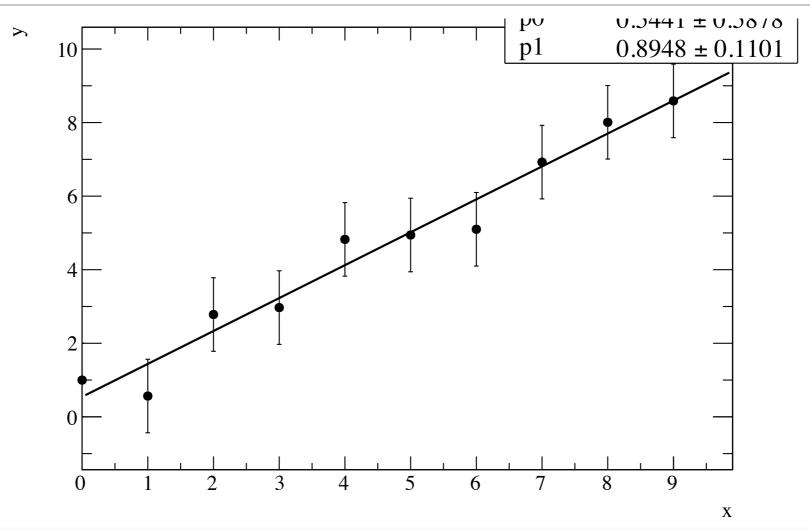
- データ点を右クリック (Mac は 2 本指クリック)
- SetMarkerAttributes を選択
- 色やマーカーの形状を変更可能

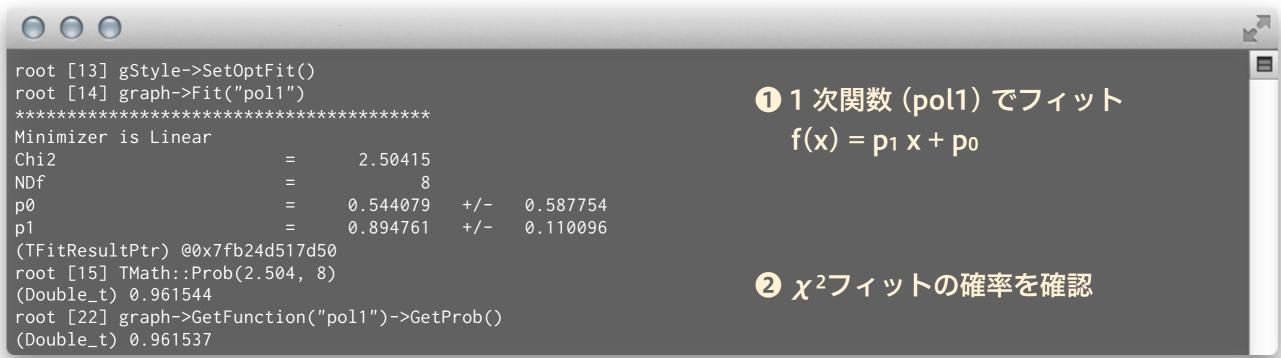
誤差棒を足す



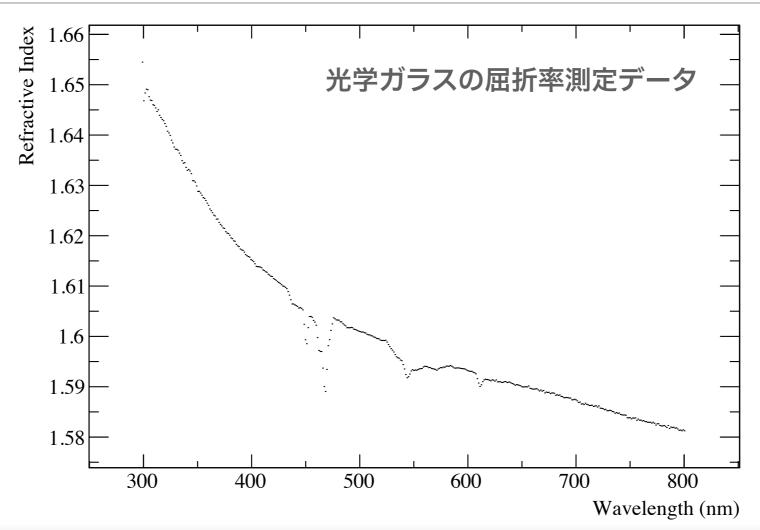


既存の関数でのフィット





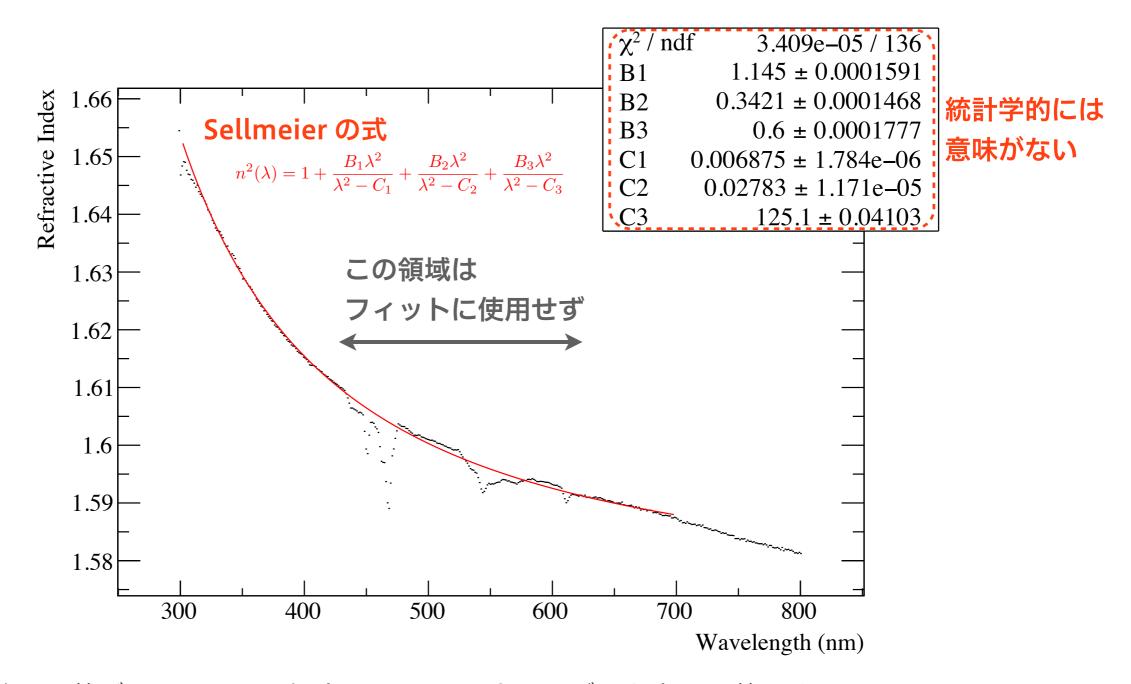
ファイルの読み込み



ついでに好きな関数形でフィットしてみる

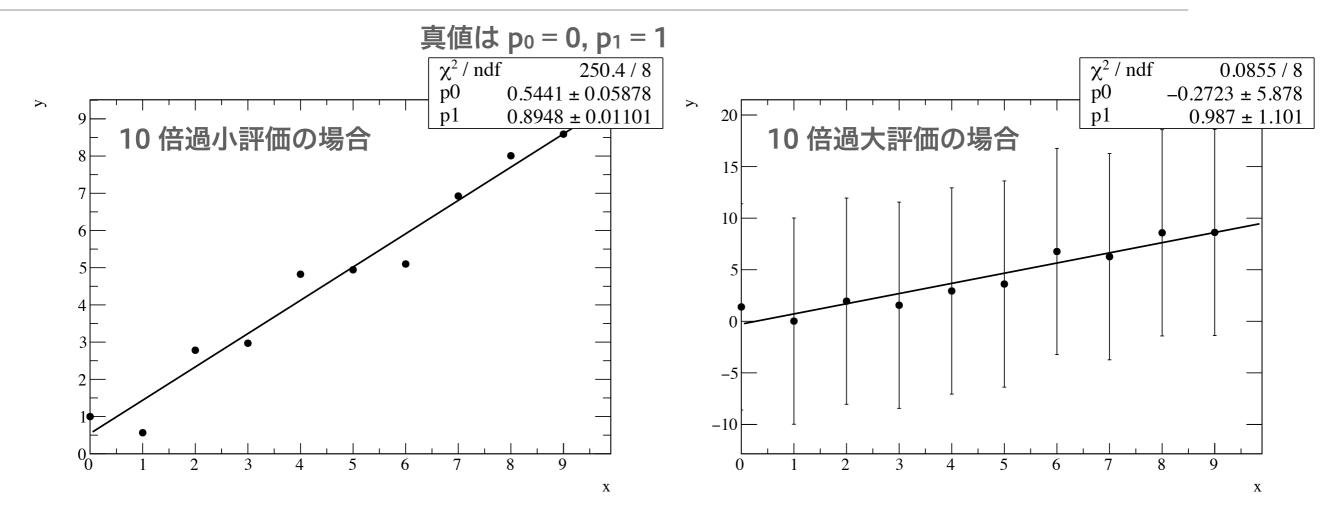
```
000
$ cat Sellmeier.C
(略)
Double_t SellmeierFormula(Double_t* x, Double_t* par) { 1フィット用関数の定義
(略)
 Double_t lambda2 = TMath::Power(x[0] / 1000., 2.); 2 変数 x[] とパラメータ par[] から計算
 return TMath::Sqrt(1 + par[0] * lambda2 / (lambda2 - par[3]) +
                   par[1] * lambda2 / (lambda2 - par[4]) +
                   par[2] * lambda2 / (lambda2 - par[5]));
void Sellmeier() {
(略)
 TF1* sellmeier = new TF1("sellmeier", SellmeierFormula, 300, 800, 6);
 sellmeier->SetParameter(0, 1.12);
                                                     3 関数の初期値を与える
 sellmeier->SetParLimits(0, 0.8, 1.2);
 sellmeier->SetParName(0, "B1");
(略)
 TGraph* graph = new TGraph("UVC-200B.csv", "%lg,%lg,%*lg"); 4 ファイルの読み込み
 graph->SetTitle("; Wavelength (nm); Refractive Index;");
 graph->Draw("ap");
 graph->Fit("sellmeier", "w m e 0", f", 300, 700);
                                                     ⑤フィット
(略)
 TF1* sellmeier2 = new TF1("sellmeier2", SellmeierFormula, 300, 700, 6);
 sellmeier2->SetParameters(sellmeier->GetParameters());
 sellmeier2->SetLineWidth(1);
 sellmeier2->SetLineColor(2);
 sellmeier2->Draw("l same");
```

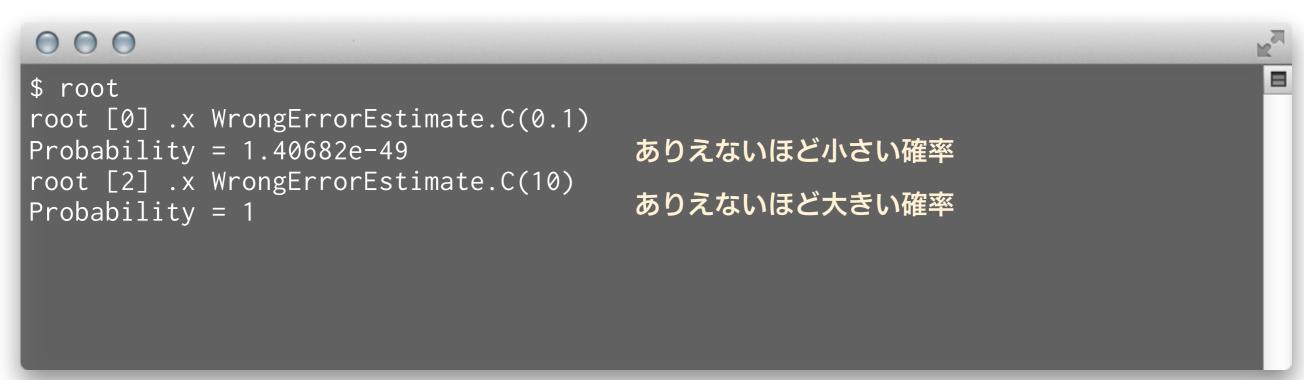
ついでに好きな関数形でフィットしてみる



- 測定値に誤差がついていない場合、ROOT は全てのデータ点に誤差 1 をつける
- **L** したがって、 χ^2/ndf の値は統計学的にあまり意味がない
- 得られたパラメータの誤差もあまり意味がない
- ★ 大雑把なパラメータを知るには良いが「精度良くパラメータが求まった」とか言わない

誤差の過小評価、過大評価が与える影響





000 \$ cat WrongErrorEstimate.C void WrongErrorEstimate(Double_t error = 1.0) { TGraphErrors* graph = new TGraphErrors; for (int i = 0; i < 10; ++i) { double x = i; double y = i + gRandom->Gaus(); // Add fluctuation with a sigma of 1 double ex = 0; double ey = error; graph->SetPoint(i, x, y); graph->SetPointError(i, ex, ey); graph->SetTitle(";x;y;"); graph->SetMarkerStyle(20); graph->Draw("ap");

std::cout << "Probability = " << graph->GetFunction("pol1")->GetProb() <<</pre>

gStyle->SetOptFit();

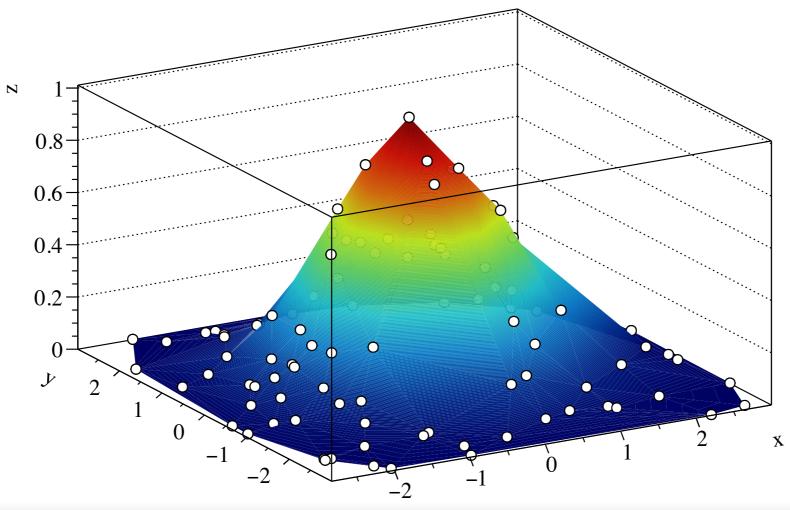
graph->Fit("pol1");

std::endl;

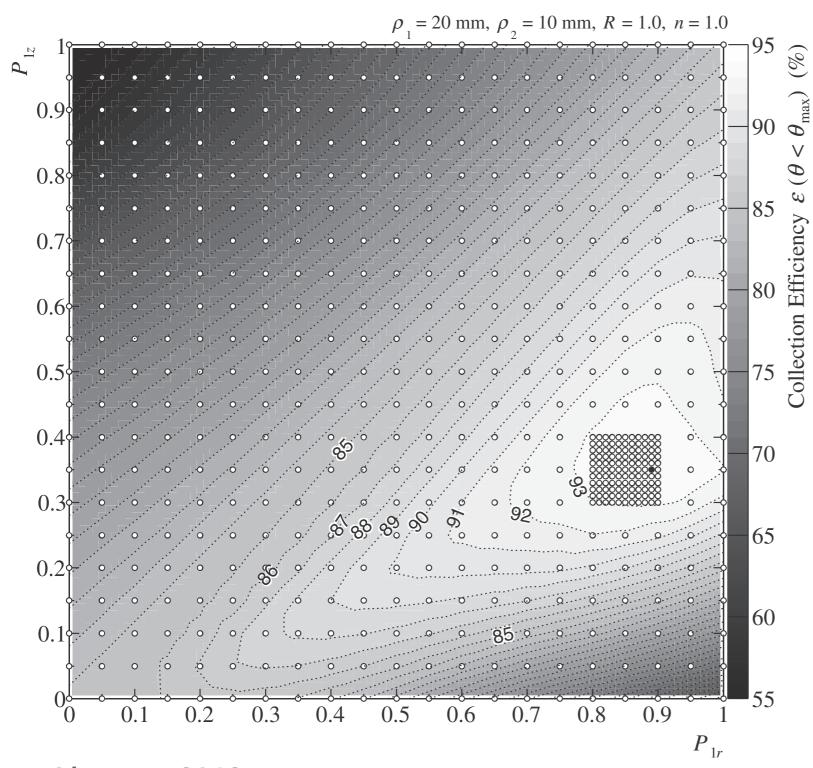
2次元グラフ

変数 (x, y) に対して従属変数 z(x, y) が決まるもの

単純な例



実際の使用例



Okumura 2012

- 経験的には、あまり使用機会は多くない
- 2次元ヒストグラムの ほうが登場頻度は高 い
- XY ステージを使った測定など、離散的な測定で使用
- 限られたデータ点数 から数値を補間する ときにも便利
 - ドロネー図 (Delaunay diagram) を使って分割される

ROOTオブジェクトの名前

ROOT オブジェクトの名前

```
000
$ root 1 hist: C++ 上の変数名 2 "h": ROOT の管理する名前
root [0] TH1D* hist = new TH1D("h", ";#it{x};Entries", 5, -5, 5)
(TH1D *) 0x7fdc3c64c040 3 オブジェクトの実体はメモリ上にある
root [1] TH1D* hist2 = hist
                        4 C++ 上で新たに hist2 という変数名を使って
(TH1D *) 0x7fdc3c64c040
                          同じものを指すことができる
                        S ROOT のインタプリタ上では特別に
root [2] h
(TH1D *) 0x7fdc3c64c040
                          ROOT の管理する名前でもオブジェクトに触れる
root [3] hist->Draw()
                        ⑥ 実体はどれも同じなので、結果は同じ
root [4] hist2->Draw()
root [5] h->Draw()
root [6] gDirectory->ls() 7 "h" というオブジェクトは、gDirectory に登録されている
OBJ: TH1D h : 0 at: 0x7fdc3c64c040
root [7] TGraph* graph = new TGraph 8 TGraph はコンストラクタで命名の必要がない
root [8] graph->SetName("g")
                              9 後から名前を付けられる
root [9] gDirectory->GetList()->Add(graph) 🛈 gDirectory に追加すると "g" でもアクセス可
root [10] gDirectory->ls()
OBJ: TH1D h : 0 at: 0x7fdc3c64c040
OBJ: TGraph g : 0 at: 0x7fdc3c0be610
```

なぜ名前が必要?

- ** C++ や Python 内での変数名はいつでも変更できてしまう
- 「どのオブジェクトがどれ」と区別をつけるには、 ROOT側で名前をつけておくと便利なことがある
- ROOT オブジェクトを ROOT ファイルに保存するとき、名前がついていないとオブジェクト同士の区別がつかない
- ROOT はヒストグラムと TTree のみに、名前の付与と gDirectory への登録を自動で行う (理由は知らない)

ROOT ファイル

- ROOT のクラスから作られたオブジェクトは、ほとんど全てが ROOT ファイルに保存できる
- ➡ 拡張子 .root
- データ収集の際に直接 ROOT ファイルとして保存して しまえば、解析時にいちいち ROOT オブジェクトとし て作成し直さなくて良い
 - ▶ 例:オシロの波形を TGraph や TH1 として保存する
- 解析結果も ROOT ファイルにしてしまえば、可搬性が高くなる
- 描画した図も TCanvas のまま保存可能

ROOT ファイルに保存する例

```
000
$ root
root [0] TH1D* hist = new TH1D("h", ";#it\{x\};Entries", 5, -5, 5)
root [1] hist->Draw()
Info in <TCanvas::MakeDefCanvas>: created default TCanvas with name c1
root [2] TGraph* graph = new TGraph
root [3] graph->SetName("g")
root [4] gDirectory->GetList()->Add(graph)
root [5] TFile f("mydata.root", "recreate") ① ROOTファイルを新規もしくは作成する
root [6] c1->Write()
                                          ② ROOT ファイルにオブジェクトを書き込む
root [7] graph->Write()
root [8] f.Close()
```

ROOT ファイルを開く例

```
000
$ root
root [0] TFile f("mydata.root")
                                     1 ROOT ファイルを開く
root [1] f.ls()
                                     ② 中身を確認すると、 "c1" という TCanvas と
TFile** mydata.root
                                       "g" という TGraph が保存されている
TFile* mydata.root
 KEY: TCanvas c1;1c1
 KEY: TGraph g;1
root [2] TGraph* graph = (TGraph*)f.Get("g")
                                       3 オブジェクトを取得し、キャストする
root [3] TCanvas* can = (TCanvas*)f.Get("c1")
                                         Python の場合はキャスト不要
                                         名前がないと、取り出すのが面倒
root [4] can->Draw()
                                       4 TCanvas は保存時の状態で再度開ける
root [5] TH1* h = (TH1*)can->GetPrimitive("h") 5 TCanvas 内に描画されたオブジェクトも
                                         取り出すことができる
```

C++とROOTとPython

- コンパイルという作業が必要→コンパイラ型言語
- Python に比べると色々と面倒くさい
 - ・使う側も面倒くさい(機能が少ない、書く量が多いなど)
 - 教える側も面倒くさい(メモリの処理、ポインタなど)
- 「簡単なデータ解析しかしません」「修士で就職します」の場合、C++ を学ぶ必要性は近年は低い
- C/C++ を学んだほうがよい学生
 - ハードウェア制御を実行速度重視で行う
 - ▶ ROOT や Geant4 をガリガリ使う
 - ソフトウェアの開発側に回る(ユーザに終わらない)

Python

- スクリプト型言語、コンパイルの必要がない
- テキスト処理などを初め、C++より豊富な機能を標準で備える
 - 自分で色々と機能を実装する必要がない
 - 間違いが混入しにくく、ソフト開発も素早くできる
- C/C++ より実行速度が遅い場合が多い
 - ボトルネックの箇所だけ C/C++ で書いたりすることもある
 - ▶ Python の標準ライブラリなどに含まれる機能のほうが自作 C/C++ プログラムより最適化されており早い場合もある
- 理解が簡単、教えるのも簡単
- 修士で卒業する、データ解析しかしないなら Python だけでも 生きていける

基本的な流れ

```
000
$ cd RHEA/src
                           1 コンパイラでコンパイルし、実行ファイルを生成する
$ g++ hello_world.cxx
$ ./a.out
                           2 実行ファイルを実行する
Hello World!
$ g++ hello_world.cxx -02
                           3 最適化オプションをつける
$ ./a.out
                           ※単純なプログラムだと変化ないが、一般的には速度が向上
Hello World!
$ g++ hello_world.cxx -02 -o hello_world 4 a.out はダサいので、実行ファイル名を変更
$ ./hello_world
Hello World!
$ clang++ hello_world.cxx -02 -o hello_world 5 OS X だと Clang を使用する
$ ./hello_world
                                      ※g++ と打っても同じコンパイラが走る
Hello World!
```

コンパイラとは

- 人間の読めるコードを計算機の読める形式 (機械語) に 変換する
- コンパイルしないと動かない
 - ただし ROOT は特殊で、コンパイルしていない C++ を実行 することができる(後述)
- Linux では GNU Compiler Collection (GCC)、OS X では Clang を使用するのが一般的
- 実際の大規模なソフトウェアでは多数のオプション指定が必要
- CMake や autotools で自動化が可能

C/C++ の基本

```
000
                        1 非常に初歩的なことをする場合以外は、高度な機能を使う
$ cat hello_world.cxx
#include <cstdio>
                        ためにヘッダーファイルを #include する
                        ② 必ず main 関数が実行される。他の関数は全て main 関数
int main() {
                        から呼び出される。
 printf("Hello World!\n");
                        ❸ main 関数は int の返り値が必要。ここでエラーコードを
 return 0;
                        返して main を抜ける。0 は正常終了の意味。
```

- ROOT の場合は特殊で、main 関数は ROOT 自体が既に実行している
- ROOT5 の場合は CINT が、ROOT6 は Cling がスクリプト内の関数を呼び出すため、スクリプト内に main 関数は不要
- ROOT を使わない純粋な C++ の場合、コンパイルしないと実行できない

ROOT スクリプトの場合

```
000
$ cat hello_world.C
void hello_world() {
 printf("Hello World!\n");
```

- main 関数は定義する必要なし
- 多くの標準的なヘッダーファイルも #include する必要なし

Python の場合



- 書き方と実行方法は何通りかある
 - スクリプトを python コマンドに実行させる
 - ▶ スクリプト自体を実行し内部で python コマンドを走らせる
 - module として使う方法(import する)

ROOT スクリプトで main を再定義すると

```
000
$ cat main.C
int main() {
 return 0;
$ root
root [0] .x main.C
Error in <TApplication::TApplication>: only one instance of TApplication allowed
   Welcome to ROOT 6.06/04
                                          http://root.cern.ch
                                  (c) 1995-2016, The ROOT Team
   Built for macosx64
  | From tag v6-06-04, 3 May 2016
  Try '.help', '.demo', '.license', '.credits', '.quit'/'.q'
/Users/oxon/.rootlogon.C:38:7: error: redefinition of 'fontid'
Int_t fontid=132;
/Users/oxon/.rootlogon.C:38:7: note: previous definition is here
Int_t fontid=132;
```

- 新しく作られた main ではなく、ROOT が新たに走り出す
- main は特殊な関数なので、ROOT スクリプト内では使わないこと
- ~/.rootlogon.C が 2 回呼び出されてエラーを吐いている

もう少し ROOT っぽい例 (C++)

```
000
$ cat first_script2.C
void first_script2(int nbins, int nevents) {
 TH1D* hist =
                           ① 普通の C++ の教科書的には、TH1D hist("myhist" …) とする
     new TH1D("myhist", "Gaussian Histogram (#sigma = 1)", nbins, -5, 5);
 hist->FillRandom("gaus", nevents);
 hist->Draw();
$ root
root [0] .x first_script2.C(500, 100000)
root [1] myhist->GetName()
(const char *) "myhist"
root [2] gROOT->Get("myhist") 2 ROOT が名前でオブジェクトの管理をしている
(TObject *) 0x7fe79d0572d0

❸ ROOT では名前を使ってオブジェクトのアドレスを取り出せる

root [3] myhist
(TH1D *) 0x7fe79d0572d0
root [4] delete gROOT->Get("myhist") <mark>4 delete でオブジェクトをメモリ上から消すと、</mark>
root [5] gROOT->Get("myhist")
                                 ROOT の管理からも外れる
(TObject *) nullptr
```

- **■** C++ にはスコープ (scope) という概念が存在する
- ♣ {} や関数を抜けると、その変数は消えてしまう
- new してオブジェクトのアドレスをポインタ変数として扱うと、delete が呼ばれるまでオブジェクトがメモリ上から消えない (変数 TH1D* hist は消える)
- ROOT が "myhist" という名前のオブジェクトを記憶しているので、後から参照できる

new を使わないと

```
000
$ cat first_script2_wo_new.C
void first_script2_wo_new(int nbins, int nevents) { ① ポインタでない変数にする
 TH1D hist("myhist", "Gaussian Histogram (#sigma = 1)", nbins, -5, 5);
 hist.FillRandom("gaus", nevents);
 hist.Draw(); 2 メンバ関数の呼び出しは -> ではなく. を使う
$ root
root [0] .x first_script2_wo_new.C(500, 100000) 3 TCanvas に何も表示されない
root [1] myhist->GetName()
input_line_79:2:3: error: use of undeclared identifier 'myhist'
 (myhist->GetName()) 4 オブジェクトが消えているので、ROOT も既に管理していない
root [2] gROOT->Get("myhist")
(TObject *) nullptr
root [3] gROOT->ls()
```

- この書きかたは教科書的な C++ では普通
- ROOT の場合、生成したオブジェクトをスクリプト終了後にも引き続き 描画させ解析したい
- ポインタを使わないとこれができない

Python の場合

```
000
$ cat first_script2.py
import ROOT
def first_script2(nbins, nevents):
   global hist
   hist = ROOT.TH1D('myhist', 'Gaussian Histogram (#sigma = 1)', nbins, -5, 5)
   hist.FillRandom('gaus', nevents)
   hist.Draw()
$ python
>>> import first_script2
>>> first_script2.first_script2(500, 100000)
>>> first_script2.hist.GetName()
'myhist'
>>> import ROOT
>>> ROOT.myhist.GetName()
'myhist'
```

- Python も同様に、関数を抜けるとその変数は消えてしまう
- LC++の delete の相当する機能も働くため、オブジェクト自体も消える
- これを防ぐには global 変数を使う

なぜ ROOT はスクリプト型言語のように動くのか

- ROOT 5 では CINT (シーイント) という C/C++ のインタプリタ (コンパイルしないで機械語に逐次変換する) が使われており、C/C++ を (ほぼ) 実行できる
- ROOT 6 では Clang を使用した Cling というインタプ リタが使われるようになった
 - より C/C++ の文法に則っている
 - 実行速度の向上
 - ▶ GCC や CINT よりエラーが分かりやすい、読みやすい

型 (Type)

- C/C++ には型がある
 - ▶ 符号あり整数型:char (8 bit)、short (16)、int (32 or 64)
 - ▶ 符号なし整数型:unsigned char など
 - ▶ 浮動小数点型:float (32 bit)、double (64)
 - 32 bit OS か 64 bit かで int の大きさが違う
- ROOT では環境依存をなくすため、Short_t や Long_t などが定義されている (C の教科書で見たことのない型が ROOT の例で出てくるのはこのため)
- ** C++11 (新しい規格の C++) では、このような混乱をなくすために int8_t (8 bit)などが追加された

クラス (Class)

- 色々な変数や機能をひとまとまりにした、型の「ような」もの
- 好きなものを自分で追加できる。型は追加できない。
- TGraph や TH1D は ROOT が持つクラス
 - 内部にデータ点やビン幅などの数値情報
 - 名前、タイトルなどの文字情報
 - Draw() や GetStdDev() などのメンバ関数

C++ のクラスの例

```
000
double x1 = 1.5, y1 = 2.3, z1 = -0.4;
double x2 = -3.1, y2 = 5.6, z2 = 1.9;
                                             1 型だけでやると見づらく煩雑
double x3 = x1 + x2, y3 = y1 + y2, z3 = z1 + z2
Vector3D v1(1.5, 2.3, -0.4);
Vector3D v2(-3.1, 5.6, 1.9);
                                    2 クラスにすることでより直感的に
Vector3D v3 = v1 + v2;
```

- 情報をクラスにまとめることで扱いやすくなる
- 数値データに限らず、なんでもクラスにできる

簡単なクラスの例(Vector3D.h)

```
000
#ifndef VECTOR_3D
#define VECTOR 3D
class Vector3D {
private:
 double fX;
 double fY;
 double fZ;
public:
 Vector3D();
 Vector3D(double x, double y, double z);
 Vector3D(const Vector3D& other);
 virtual ~Vector3D();
 virtual double X() const { return fX; }
 virtual double Y() const { return fY; }
 inline virtual double Z() const;
 virtual void Print() const;
```

- □ 「宣言」はヘッダーファイルに、定義はソースファイルに書くのが一般的
- 拡張子はそれぞれ .h/.hpp/.hxx/.hh などか、.cc/.cpp/.cxx など

使用例(Vector3D_main.cxx)

```
000
#include <cstdio>
#include "Vector3D.h"
int main() {
 Vector3D v0;
                                       // default constructor
 Vector3D v1(1.5, 2.3, -0.4); // constructor with arguments
 Vector3D v2 = Vector3D(-3.1, 5.6, 1.9); // operator=, constructor
                                   // operator=, operator+
 Vector3D v3 = v1 + v2;
 Vector3D v4(v1 - v2);
                                      // copy constructor, operator-
 double product = v1 * v2;
                                       // operator*
 v0.Print();
 v1.Print();
 v2.Print();
 v3.Print();
 v4.Print();
 printf("v1*v2 = %f\n", product);
 return 0;
```

■ 自分で作ったヘッダーファイルを #include することで、新たな機能として使えるようになる

実行例

```
000
$ g++ -c Vector3D.cxx
$ g++ -c Vector3D_main.cxx
$ g++ Vector3D.o Vector3D_main.o -o Vector3D
$ ./Vector3D
(x, y, z) = (0.000000, 0.000000, 0.000000)
(x, y, z) = (1.500000, 2.300000, -0.400000)
(x, y, z) = (-3.100000, 5.600000, 1.900000)
(x, y, z) = (-1.600000, 7.900000, 1.500000)
(x, y, z) = (4.600000, -3.300000, -2.300000)
v1*v2 = 7.470000
```

- 各ファイルを順次コンパイルし、オブジェクトファイル (.o) を生成する
- 最後にオブジェクトファイルを結合し、実行ファイルを作る

Python のクラスの例 (vector.py)

```
000
class Vector3D(object):
   def __init__(self, x = 0., y = 0., z = 0.):
       self.x = x
       self.y = y
       self.z = z
   def __str__(self):
        return "(x, y, z) = (%f, %f, %f)" % (self.x, self.y, self.z)
   def __add__(self, other):
        return Vector3D(self.x + other.x, self.y + other.y, self.z + other.z)
   def __sub__(self, other):
       return Vector3D(self.x - other.x, self.y - other.y, self.z - other.z)
   def __mul__(self, other):
       return self.x*other.x + self.y*other.y + self.z*other.z
```

- C++ とは書き方がかなり違うので、よく見比べてください
- あくまで例なので、実際には既存のライブラリを使うことの方が多い
 - 開発速度が速い
 - 自作することによる間違いの混入を防ぐ

実行例

```
000
$ python vector.py
(x, y, z) = (0.000000, 0.000000, 0.000000)
(x, y, z) = (1.500000, 2.300000, -0.400000)
(x, y, z) = (-3.100000, 5.600000, 1.900000)
(x, y, z) = (-1.600000, 7.900000, 1.500000)
(x, y, z) = (4.600000, -3.3000000, -2.300000)
\sqrt{1} \times \sqrt{2} = 7.470000
```

C++11 について

- C++ の拡張として C++11 が策定された
 - スマートポインタ
 - ▶ 正規表現
 - マルチスレッド
 - ・型の増加
 - ▶ 型推定と auto
 - 書ききれない、理解しきれていない
- ROOT を使うだけであれば初学者は気にしなくて良い
- C++ は勉強したことがあるのに理解できない構文で書かれた C++ (のような) コードに遭遇したら C++11 かも
- C++0x は以前の名前、C++14/C++17 はさらに後継
- CTA のソフトウェア開発では C++11 と Python 3 が推奨されている

第4回のまとめ

- TGraph による簡単なグラフの作成とフィット例
- C++/Python の非常に簡単な説明

■ 分からなかった箇所は、各自おさらいしてください